

イザヤ書 57 章 14 節 b-21 節

エフェソの信徒への手紙 2 章 11 節-22 節

マルコによる福音書 6 章 30-44 節

本日からの礼拝自粛解除は、緊急事態宣言の発令に伴い、延期することといたしました。しかし、単に延期するのではなく、礼拝をインターネットで配信していただきます。配信は、今までも行っておりましたが、再開に向けた歩みの一つとして、あらたに始めたいと思います。教会のホームページ、または「東京聖三一教会 7 月 18 日」で検索して配信画面をお開き下さい。

さて、本日の聖書日課に共通する主題は、「平和」だと思います。旧約日課、「イザヤ書」は、57 章以下です。新共同訳では、「へりくだる者の祝福」という題がつけられている部分です。この部分は、56 章から始まる第 3 イザヤに分類され、そこではバビロン捕囚からの解放される新しい希望が主題になっており、特に今日の個所では、王国の滅亡を招いたイスラエルの思い上がりを批判し、「へりくだる者」が高く評価されています。

そのことに関して、57 章 15 節には、「**高く、あがめられて、永遠にいましその名を聖と唱えられる方がこう言われる。わたしは、高く、聖なる所に住み打ち砕かれて、へりくだる霊の人と共にあり へりくだる霊の人に命を得させ打ち砕かれた心の人に命を得させる**」とあります。「へりくだる」ことは、主なる神様に対して人間がとるべき対応です。主なる神様は、人間が到達できない高さにおられるからです。しかし、主なる神様は、ただ高いところにおられるだけの方ではありません。わたしたち人間と共にいて下さる方です。主なる神様がそのような方であるからこそ、わたしたちは主なる神様にへりくだることは、人間同士の間でも、互いに尊重しあうことへもつながります。その意味で、主なる神様にへりくだることは、人間同士の平和につながるのです。

旧約日課の最後に「**神に逆らう者に平和はないと、わたしの神は言われる**」（イザヤ 57:21）とあり、これこそ、他宗教や異文化を認めない、平和をもたらさない言葉のように思えます。しかし、そうではありません。「主なる神様に逆らう」あるいは、「主なる神様を無視する」という場合、それは主なる神様の位置に、意識的であれ無意識的であれ、何かが置かれることを意味します。それが、人間が望む神様であれ、特定の指導者的な人間であれ、また思想やイデオロギーであれ、理想やクリエイティブなビジョンであれ、またテクノロジーに基づいた未来であれ、人間が作り上げる何かが、その位置にとって代わるとき、どれほどそれらに対する「へりくだる」行為があったとしても、また人間同士が互いに尊重しあうように努めたとしても、平和には至らないのです。なぜならば、人間は完全ではなく、人間が作り上げる何かも完全ではないからです。

もちろん、現代のどの地域の社会も（過去の社会もそうですが）、『聖書』の主なる神様がすべてではありません。それゆえ、個人の自由を重んじながら、多くの人と議論し何かを決める民主主義が、もっとも大切であることは確かです。しかし、もし『聖書』を読み、主なる神様を信じる人であるならば、「平和」についてこのように考えなさいと、本日の旧約日課は記していると思います。

さて、それでは「へりくだる」とは、具体的にどのような意味でしょうか。主なる神様に対しては、自分が人間に過ぎないということを実感することです。そこから、人間同士においては、いろいろな意味での違いや高低があったとしても、主なる神様ではないという意味で、同じ人間だと自覚しあうことです。しかし、それだけではありません。主なる神様は、「高く、聖なる所」に住まわれる方であると同時に、「打ち砕かれて、へりくだる霊の人」と共にいて下さる方であるから、わたしたちも互いに、困っている人、苦しんでいる人、悲しんでいる人とともにいることが大切だということです。主なる神様にへりくだるからこそ、人間同士も互いに尊重し合うこともできるのです。それは、イエス様が、最も大切な教えとして、主なる神様を愛することと、隣人を愛することを一つのこととして教えられたことに同じであると思います（マルコ 12：28-34）。

主なる神様にへりくだることを忘れ、人間同士互いにへりくだることを忘れたイスラエルは、バビロン捕囚という国家的・民族的崩壊を経験しました。しかし、主なる神様は、そのようなイスラエルに対して、自分にへりくだることを求め、「わたしは唇の実りを創造し、与えよう。平和、平和、遠くにいる者にも近くにいる者にも。わたしは彼をいやす」（イザヤ 57：19）と希望を語っています。主なる神様が望まれることは、へりくだらなかつたものが滅ぶことではなく、たとえ一時、破滅と破壊を経験したとしても、再び主なる神様を信じて、希望をもって立ち上がることに他ならないからです。

さて、本日の使徒書、「エフェソの信徒への手紙」も平和について語っています。そこにあるのはキリストによる和解と、その和解による平和です。

「実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律づくめの律法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました」（2章14～15節）とエフェソ書は述べています。そこでは、キリストが平和そのものだと語っています。なぜならば、キリストの十字架の姿によって、敵意が取り除かれ、和解が発生し、別れたものが一つとされるからです。なぜ、十字架にそのような機能があるのか。それは人間の思いと敵意をもって実行された、イエス様の十字架の刑という死が、復活によって何の効力もないことが明らかになったからです。エフェソ書は、キリスト者とは、単にイエス様を通して、主なる神様を信じる人

という意味ではなく、本当の平和の礎となる存在であることを語っていると思います。

さて、これらのことと本日の福音書の個所とどのように結びつくのか、あるいは、本日の福音書の個所に、平和という概念があるのか、それらのことを考えたいと思います。

本日の個所には、平和ということばはありません。聖書の小見出しでも、「五千人に食べ物を与える」となっています。しかし、わたしは、平和という概念と深く結び付いていると思います。ただし、注目しなければならない個所があります。そして、その注目点の捉え方によって、引き出される平和も変わります。その注目点とは、物語の結論部分です。「**すべての人が食べて満腹した（満たされた）。そして、パンの屑と魚の残りを集めると、十二の籠にいっぱいになった。パンを食べた人は男が五千人であった**」という部分です。

新しい『聖書 聖書協会共同訳』の翻訳に当たり、この箇所の従来の「すべての人が満腹した」は、解釈の広がりを残すために、「すべての人が満たされた」という直訳に近い訳を提案いたしました。しかし、このお話は、食べ物が増える奇跡物語であるという大前提から、そうはなりませんでした。確かに、多くの日本語は「**すべての人が食べて満腹した**」と訳されています。

このお話は、四つの福音書すべてに書かれています。それは、福音書を記したどの人々にとっても、イエス様についての大切なお話であることを示しています。わたしもすべての福音書で、「満たされた」と訳すべきだとは思いません。また、「満たされた」と訳す言葉は、「食料を与える、十分に食べさせる」という意味の受動態であり、「十分に食べさせられた」ということから、「満腹した」と訳しても間違いとは思っていません。しかし、「マルコによる福音書」に限って言えば、ことに、それが最初の書かれた福音書であると前提するのであれば、前後関係から考えても、この箇所は、ただ「満たされた」と訳したほうが良いと思います。なぜ、そのように考えるのか、それは約20年前にも、「福音と世界」という雑誌に拙文を掲載したことですが、このお話には、どこにパンや魚が増えた、あるいはとつても尽きなかったとは書かれていないからです。また、「旧約聖書」にあるエリヤのお話のように、「**主がエリヤによって告げられた御言葉のとおり、壺の粉は尽きることなく、瓶の油もなくならなかった**」（列王17:16）というようには書かれていないからです。しかし、このすぐ前のお話には、ヘロデの宴会の食事の描写があり（マルコ6:14-29）、この後のお話では、ファリサイ派の方々の在り方が示されており（マルコ7:1-23）、もう一度四千人の食事と同じことが繰り返されたのち、それらが、「**ヘロデのパン種とファリサイ派のパン種**」として警告されてもいるからです（マルコ8:15）。

このお話についての教会の伝統的な解釈や説教、あるいは多くの聖書学的な解釈は、イエス様によって食べ物が無限に増えた奇跡物語とします。確かに、イエス様は食べ物を増やす奇跡を行い、主なる神様の恵みは、本来は、すべて

の人を満たし、神の国・天国は、そのようなところであるという信仰と希望も大切でありまた、平和につながる事柄です。

しかし、食べ物が増えないとそのまま読むとき、そのように考えることはできません。それではどのように解釈できるでしょうか。わたしはイエス様が弟子たちに命じて、単純に一〇数人分の食料をその場にいる全員で分けたお話であると考えます。ただし、単に分けたものではありません。大切な点があります。第一に「**天を仰いで賛美の祈りを唱え**」(6:41)、新しい訳では「**天を仰いで祝福し**」ですが、今そこにある食糧を与えて下さった、天におられる主なる神様に、感謝することです。次に、誰かの分を必ず残して、自分の分をとるということです。この点は明記されていませんが、弟子たちがまず、他の人の分を考えて自分の分を取り、残りを他の人々に渡し、渡された人も同じように、全員に行き渡るまで繰り返し、その結果、人数は男だけ数えても五千人であり、誰かの分として残ったパンくずが、十二の籠一杯になったのでしょうか。十二の籠一杯のパンくずとは、そのように分けた結果なのです。

このような食事は、生物的に栄養を摂取するという意味では、きわめて不十分です。しかし、主なる神様が与えて下さったこの世界にある食べ物とは、そういうものである。言いかえると、このお話は、食料で満たされる(満腹する、満足する)という概念を、主なる神様の視点で変えた(本来の形に戻った)お話にほかならないのです。「満たされる」とは、自分の欲望や空腹を完全に満たす行為ではなく、その場の全員で分け合う行為である、それが、主なる神様がこの世界を創造された時の食料事情であるということです。イエス様は、どんな人間でも行う、食べるという行為、そこから主なる神様の視点が変わるとき、言い換えれば、主なる神様の求める平和につながる、イエス様はそのことを示されたのだと思います。

弟子たちは、この出来事の意味がわからなかったようです。しかし、それでよいのです。イエス様は、弟子たちが、すぐには理解できないことを分かっておられたからです。また、理解できず、実行できないことを強く批判することもなかったからです。なぜならば、この出来事も、十字架と復活という大切なことがらを信じなければ、受け入れられないからです。

この地上の命がすべてと考えるとき、「食べること」はいろいろな意味で重要です。それゆえに、奪い合うことも、競い合うことも起こります。しかし、分け合うことへとつなげるのは困難です。しかし、イエス様は、十字架と復活を通して、死が終わりではなく、この世界の命がすべてではないことを示されました。その信仰に立つとき、「食べること」において分け合うことの大切さが示されます。

もし、イエス様と弟子たちが、分け合うことを群衆に教えながら、自分たちだけはその教えを推進する上級幹部として、十分に食べていたら、何の説得力もないでしょう。しかし、イエス様は、主なる神様がそうであるように、その場にある食べ物を、その場にもとにいて分け始めました。そこから平和が始まるからです。これからもその「平和」を伝える教会でありたいと思います。